

## 藤沢市総合教育会議 議事録

会議名	令和5年度第1回 総合教育会議
開催日	2023年(令和5年)8月17日(木) 14:00~15:50
場 所	本庁舎6階 会議室6-1
出席者	(市側) 鈴木市長 (教育委員会) 岩本教育長、市村委員、木原委員、飯盛委員、種田委員 (関係職員) 教育部長、教育部参事、教育総務課長、同課主幹、同課課長補佐、教育指導課長、同課学校教育相談センター長、同課指導主事

### 事務局（司会）

- ・ただいまから令和5年度第1回総合教育会議を開催させていただきます。
- ・会議を開会する前にご来場の皆様にお願いがございます。スマートフォン・携帯電話は電源をお切りになるか、マナーモードに設定をお願いいたします。
- ・次に本日の傍聴人の皆様で録音・録画・写真撮影を行う方がいらっしゃいましたら挙手をお願いします。（なし）
- ・会議の記録のために事務局で録音と写真撮影をさせていただきますのでご了承ください。写真撮影は傍聴の方の顔は映らないように配慮いたします。
- ・続きまして総合教育会議の開催に当たりまして本会議の目的について改めてご説明をさせていただきます。この会議の目的は、市長と教育委員会が十分な意思疎通を図り、本市の教育の課題やあるべき姿を共有し、次代を担う全ての子どもたちを市全体で見守り育む取組を共有する場でございます。
- ・今回はご講演をいただき、認定NPO法人フリースペースたまりば理事長の西野先生にも冒頭からご参加をいただいております。先生のご紹介は後ほどさせていただきますのでよろしくお願い申し上げます。
- ・それでは、開会にあたりまして総合教育会議の座長でございます鈴木市長から一言ご挨拶をお願いいたします。

## 鈴木市長

- ・本日は大変お忙しい中、また暑い中、総合教育会議にご出席をいただきまして誠にありがとうございます。
- ・新型コロナが5類となりまして、制約のない夏が戻ってきました。今日もここへ来る前に鶴沼皇大神宮の人形山車の例大祭があったので行ってまいりました。子どもたちがお囃子等で大変元気よく、お祭りでにぎやかにしている姿を見てきました。
- ・一方で、そういう中でも家から出られない、あるいは給食等もなく非常に困っている方もいらっしゃるのかな、と思っているところでもございます。幸い、藤沢では子ども食堂等もかなり多くの箇所で行っていただけており、また青少年課の方で行っている、サマースクールという取組に行ってもらおうということも行われるようになりましたけれども、誰1人取り残さない社会を作っていくべく、いろいろなところに目を向けながら対応していければと思っております。
- ・藤沢市の公立中学校は今、特にスポーツに関して全国大会等いろいろ活躍している方もいらっしゃいますし、総じて元気がいいと思っております。
- ・ただ、公立中学校の17人に1人が、世話をしている家族がいるヤングケアラーであるということも言われておりますので、子どもとしての時間というものを大切に守って、それぞれが幸せを感じる地域を作っていきたいと思っております。特に不登校児童生徒が増えておりますし、またこの夏休みをきっかけに増えてしまうかもしれないという懸念もあります。
- ・そういったことを多くの方で共有しながら対応を図り、子どもの気持ちに寄り添って、それぞれ1人1人違う対応であると思っておりますので、そのあたりをきめ細かく行っていければと思っております。
- ・本日はNPO法人のフリースペースたまりばの理事長の西野博之さん、川崎市の子ども夢パークには先日私も視察に行かせていただきましたが、是非お話をお聴きし、これからの不登校を考えることの助けとしていただき、またこれを実践する機会にしていただけたら嬉しいと思っておりますので、総合教育会議の議題として、講演をお願いしたわけでございます。最後までよろしく願いいたしまして、挨拶に代えさせていただきます。

## 事務局（司会）

- ・ありがとうございました。続きまして事務局から本日の資料の確認をさせていただきます。

（資料確認）

- ・それではここからは座長の鈴木市長の方に進行をお願いしたいと思います。

## 鈴木市長

- ・それでは、議題に沿って会議を進めて参ります。まず、議事録の署名人ということで、この件については事務局から説明をお願いいたします。

## 事務局

- ・今回の署名人につきましては、鈴木市長と岩本教育長をお願いしたいと思います。

## 鈴木市長

- ・議事録の署名については、私と岩本教育長ということでよろしいでしょうか？  
＜「異議なし」の声あり＞
- ・異議なしということで、そのように進めさせていただきます。
- ・それでは、議題の1について事務局から説明をお願いいたします。

## 事務局

- ・今回議題としまして、不登校児童生徒への支援について取り上げさせていただいております。不登校児童生徒の数は全国的にも増加の傾向であり、本市においても同様の傾向となっております。
- ・市といたしましても、今年度の施政方針において、長期休業中などに実施する補習授業、補習指導について小学校では実施校を拡充し、中学校では別室等での学習やオンライン学習に対応できるよう内容を充実させるということを掲げております。
- ・本日は本市教育委員会の教育指導課から、本市における不登校児童生徒の現状や取組課題などについて説明させていただきます。
- ・次に西野先生から不登校児童生徒への支援についてご講義いただきます。
- ・その後、西野先生を交えた中で委員の皆様からの質疑や意見交換などを行ってまいりたいと考えておりますので、よろしくをお願いいたします。
- ・それでは、教育指導課から説明をお願いいたします。

## 教育指導課

- ・今回不登校児童生徒への支援について、不登校児童生徒の気持ちが学びに向かうきっかけとなる支援というテーマのもと、教育指導課からは、藤沢市における不登校児童生徒の現状や取組課題などについて説明させていただきます。
- ・まず、不登校の定義について確認いたします。不登校とは、何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因等により、登校しない、あるいはしたくともでき

ない状況にあるため、年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由によるものを除いたものと、文部科学省生徒指導提要において定義されております。欠席日数が年間30日までいかない場合は、不登校傾向と考えることができます。

- ・全国的に不登校の児童生徒数は年々増加しており、令和3年度、小学校は8万人を超え、中学校は16万人を超えました。
- ・本市の状況を見てみます。平成27年度から令和3年度までの本市の不登校児童生徒数をグラフにしてみました。全国と同じように本市でも不登校の児童生徒は、小学校、中学校ともに年々増加しており、令和3年度は小学校で326人、中学校で544人になっています。
- ・令和4年度については、県や国で集計中のため、正式な人数はお示しできませんが、これまでの傾向と同じように、令和3年度に比べ増加しています。
- ・令和3年度の本市の不登校児童生徒数を学年別に表すとこのようになります。全国の傾向と同じように、中学校入学後にさらに増加しています。
- ・不登校の増加の要因につきましては、複雑化、多様化している状況があります。この二、三年は特にコロナ禍の影響により、生活リズムが乱れやすい状況や学校生活において様々な制限がある中で、登校する意欲が湧きにくい状況にあったことなども背景として考えられます。
- ・また、学校に登校するという結果だけを目標にするのではなく、児童生徒の将来の社会的自立をめざし、学校以外の場も含めて、教育機会を保障することが大切であるという、教育機会確保法の趣旨の理解が進んでいることも考えられます。
- ・では、不登校児童生徒の状況から何が見えてくるのかを考えてみます。神奈川県の実地調査結果をもとに、県の教育委員会が分析している資料では、不登校への対応として大切なことを、次のように述べています。
- ・一つ目は、児童生徒が抱える困難を早い段階から積極的に把握し、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーと連携し、関係機関に繋げていく必要性。
- ・二つ目は、相談支援教室やフリースクールなど学校以外の多様な学びの場に繋いでいくことの重要性。
- ・三つ目は、不登校児童生徒への支援にICTを有効活用していくこと。
- ・四つ目は、不登校の未然防止を図る上で、児童生徒にとって魅力ある学校をめざした取組を進めること。
- ・この中からキーワードを抜き出すと、学校が行う不登校対応がよりはっきりと見えてくると思います。

1. 早い段階から積極的に把握し、関係機関に繋げていく。

2. 多様な学びの場に繋いでいく。

3. ICTを有効活用。

4. 不登校の未然防止を図る上で、魅力ある学校作り

の四つです。

- ・一つずつ学校の取組として見ていくと、一つ目の“早い段階から積極的に把握し、関係機関に繋げていく”については、不登校には様々な要因、背景があるからこそ、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーと連携しながら、アセスメントをして、児童生徒の抱える困難や現状の把握に努めています。
- ・次に、相談支援教室やフリースクールなど、学校以外の“多様な学びの場に繋いでいく”ことの重要性から、市教委として、令和元年度より、年に1回、フリースクールと情報交換会を開催しています。昨年度は学校にも声をかけ、連携に繋がるよう、希望する教員も参加できるようにしました。
- ・また、今年度は年2回の開催とし、1回目は例年通り、市教委とフリースクールなどの団体が実際に顔を合わせる機会とし、2回目は昨年を引き続き、希望する教職員も参加し、それぞれの取組について理解し、子どもたちのためにどのように連携していくか考えられるよう検討していく場となればと思っています。
- ・次に、三つ目の不登校児童生徒への“ICTの有効活用”としては、朝の会や授業の様子を配信したり、課題の配布など、児童生徒の状況に応じて対応しています。
- ・最後の四つ目の“不登校の未然防止”とは、新たな不登校を増やさないことと言い換えることができ、新たな不登校を増やさないためにも、“魅力ある学校作り”をめざす必要があります。そのためには、児童生徒にとって、学校を安全安心な居場所にしていくこと。そして、わかりやすい授業、参加できる授業になるよう工夫しているところです。
- ・それ以外の本市の取組として、二つ紹介いたします。一つ目は、学校以外の多様な学びの場として、善行に相談支援教室を開設しています。
- ・相談支援教室は、小集団活動を通しての不登校支援を行う場です。児童生徒が人と関係を持つ力や自信を取り戻し、学校生活や社会生活に適応できるように支援をしています。
- ・これまでは中学生の利用がほとんどでしたが、小学生の不登校児童数が増えており、利用希望の声も増えてきたため、昨年度末に小学生でも行えるプログラムを作り、施行しました。今年度についても、小学生のニーズに対応できるよう、年間を通しての小学生プログラムを準備しています。

- ・二つ目が、今年度から中学校で新たに開始した不登校生徒学習支援事業です。不登校の生徒や不登校傾向の生徒に授業時間中に学校が認めた学習指導員が、別室指導を行います。
- ・別室指導により、不登校傾向の生徒には、学習面、心情面のフォローを行うだけでなく、別室指導から教室で過ごせる時間や登校できる日を増やしていくことを目標に、それぞれの学校ごとの状況に合わせ、柔軟に運用していきます。
- ・私達としましては、不登校生徒学習支援事業を活用することで、生徒にこのような気持ちが生まれるといいなと考えています。
- ・時には同じ時間に別室に来ている生徒と会うこともあると思います。そういう環境であれば、別室に行くのが許せる友人と話ができて安心するとか、別室に行くのが先生や指導員さんが声をかけてくれるし、会って話ができるのが嬉しいな、ということを感じてくれたり、一斉指導ではなかなか勉強について行けず、自信をなくしてしまい、学校に足が向かないような子であれば、勉強のわからないところを教えてもらいながら学べるから、別室なら通えそうとか、ここに来るから部活にも行きやすい、せっかくだから、教室にも行ってみようかな、などの気持ちが生まれてきてくれることを期待しています。
- ・学校から毎月提出される学習指導員活動状況報告書の6月分に書かれていた学習指導員の方のコメントをいくつか取り上げてみました。このコメントを見ると、別室での生徒との温かい様子が伝わってきます。
- ・コメントからは、学習だけでなく、雑談や将棋などを通して学習指導員とコミュニケーションをとっていることや、自分のペースで登校できているという話、教室には行けないものの、別室での個別学習に登校する子や、その時間だけ教室を抜けて参加する生徒など本当に様々なことが書かれていました。
- ・学習内容や別室での過ごし方について、生徒一人ひとりの状況や様々なニーズに寄り添いながら、不登校生徒学習支援事業を有効に活用していることがうかがえました。
- ・しかしながら、不登校児童生徒学習支援は本当に難しく、課題も多くあります。
- ・課題と捉えていることとして、大きく四つが考えられます。
- ・一つ目は、フリースクールなど、多様な学びの場との連携です。学校やフリースクールなど、どちらも子どものために支援を考え、実行するものの、それぞれがそれぞれの支援になりがちな状況があります。学校には学校の良さがあり、フリースクールにはフリースクールの良さがあると思います。児童生徒がお互いを行き来できるような関係が築ければいいなとも考えます。それぞれに違った強みがあるからこ

そ、連携していくメリットがあるはずですよ。お互いにやっていること、できることなどをもっと理解し、お互いの良さや強みを尊重した上で、その子への支援について一緒に考えることができれば、さらに効果的だと思います。

- ・二つ目は、子どもの困り感や状況、本人のニーズを見極めるアセスメントです。不登校といっても、その要因や背景は様々です。いくつかの要因が複合的に絡んでいるケースもあれば、本人のニーズが見えづらいケースもあります。そして、その子自身も自分がどうしたいのかわからない場合や、本人と保護者のニーズが異なっている場合もあります。ニーズを正しく見極めるためにも、不登校児童生徒が相談できるよう、相談先などに繋いでいく必要もあります。また、先ほど不登校生徒学習支援事業の話をしました。別室があっても、学習指導員などがそこにも別室に来ることができない子は必ずいます。そのような家から出ることができない子へのアプローチも課題の一つだと思います。
- ・三つ目は、庁内や他機関との連携です。別室指導には人的資源や予算にも限界があり、様々な子どもたち、様々なニーズにできるだけ応えようとする、すぐに配当時間を使い切ってしまう。また、その子のニーズが必ずしも学校を求めているとも限らず、学校だけで子どもたちのニーズに合った居場所を提供することはできません。学校だけでは全てを実現できないからこそ、庁内で連携し、様々な取組を行っていく必要があります。
- ・最後は教員不足のため組織的な対応が困難であることです。不登校の子どもたちの様々なニーズにできるだけ応えていくためには、教員個人の力で対応するだけでなく、組織としてチームで対応していくことが重要です。しかしながら、今の学校現場は、教員不足という大きな課題に直面しています。子どもたちのためにも、組織として柔軟に様々な対応が実現できるよう、改善していかなければならない課題と捉えています。
- ・最後になりましたが、今回このような機会をいただいたことで、不登校について改めて理解が深まることと思っております。
- ・また、この後の西野先生からの講義で、これらの課題を解決、改善していくためのヒントや視点がいただけると幸いです。
- ・教育委員会といたしましても、児童生徒が社会的に自立することをめざし、学校が子どもたちのニーズに合った他機関との連携を図りながら、学校としてできる支援を最大限実施することができるよう、不登校児童生徒の支援に取り組んでいきたいと考えております。

鈴木市長

- ・ありがとうございました。続いて講演に移らせていただきます。何か質問あれば後ほどいただきたいと思います。よろしく願いいたします。
- ・続きまして西野先生の方からご講義ご講演をお願いしたいと思います。まず事務局から西野先生のご紹介をお願いします。

## 事務局

- ・それでは西野先生につきましてご紹介させていただきます。西野先生は認定NPO法人フリースペースたまりばの理事長をお務めになられており、川崎市の公設民営の不登校児童生徒の居場所フリースペースえんや川崎若者就労生活自立支援センターブリュッケの総合アドバイザーとしてご活躍をされていらっしゃいます。
- ・その他の役職といたしましては神奈川県青少年問題協議会委員、神奈川県学校フリースクール等連携協議会委員、川崎市不登校対策連絡協議会委員などを務めになられております。また、神奈川大学での非常勤講師も務めされていらっしゃいます。
- ・著書といたしましては、「居場所のちから 生きているだけですごいんだ」や「西野流ゆる親のすすめ」など多数ございます。
- ・本日は、今回の議事である不登校児童生徒への支援についてをテーマに、先生のこれまでのご経験やご知見を活かし、子どもたちの学びの芽を育むための工夫などについてお話を伺いたいと思います。それでは西野先生よろしく願いいたします。

## 西野氏

- ・皆さんこんにちは。今ご紹介いただきました西野です。何者かという、何らかの理由で学校に行きづらい不登校、大人たちが勝手に名付けた子どもたちにしてみれば別にその名前で呼ばれることが何ら嬉しいわけではない言葉ですが、その学校に行っていない子どもたちの居場所作りに37年前から関わってきました。
- ・32年前にフリースペースたまりばという場所を川崎に開設しました。
- ・98年から川崎で子ども権利条例を作るときの調査研究委員会の世話人の1人として、条例の策定に関わりました。この条例が2000年12月満場一致で採択された。それを記念してその具現化をめざした子ども夢パークを作るところに関わってまいりました。2003年にオープンしまして、今年で満20年を迎えました。2021年まで15年間ここの所長を務めていました。現在総合アドバイザーです。
- ・市や県、国の委員をいろいろと務めてまいりました。現在日本ユニセフ協会の子どものやさしいまち作りの委員などもしています。
- ・私の活動の原点は何かと今回改めて考えてみると、学校に行けないだけで命を落とす子どもたちの存在です。

- ・ たかが学校、されど学校。全国で教員研修に呼ばれるときも、嫌がられる言葉ではありませんが、たかが学校、という言葉を使わせていただいています。
- ・ なぜ、今の学校教育制度の学校に行けないだけで、子どもたちは命を落とさなければならぬのか。不登校・ひきこもりというのは、命に関わる問題なんだということをしっかりベースに据えないと、不登校支援という言葉だけが上滑りして何も見えなくなってしまうんですね。
- ・ 命を真ん中に据えた、安心してすごせる居場所を作っていく。そして学校にどうしても行きづらかったら学校外でも育ち学ぶ、そんな選択肢をしっかりと広げていく必要を感じています。
- ・ 川崎市で権利条例を作るということになったときに、まずベースに考えたことは子ども観です。
- ・ 日本社会で虐待が一向に減らない、体罰も減らない、なぜだ。それは日本社会の中に根強く残っている職人の半人前思想。偉そうに大きな口、偉そうな口をきくな。お前何歳だ。知識もない経験もない体力もない、自分で金も稼げない、そんな奴が偉そうな口きくな、いっばしの大人になってから偉そうな口きけ、というこの職人の社会にある半人前思想。子どもたちを未熟なものとするこの考え方が私達の社会に色濃く残ってしまいました。
- ・ そこで、権利条約を作るときにポーランドのコルチャック先生の言葉を、今一度学校の教員研修のベースに据えなきゃいけない、ということを私は川崎でも主張しています。
- ・ コルチャック先生の言葉、「子どもはだんだんと人間になるのではなく、既に人間である」。
- ・ 生まれた瞬間から、子どもは1人の人間であって権利の主体である。だから大人より劣った存在として差別されてはなりません。
- ・ この当たり前のことが、まだまだ日本の学校教育の制度の中においても、社会の中や家庭の中においても守られていない。だから子どもたちが被害に遭っていきます。
- ・ 生まれた瞬間から、もう権利主体である1人の人間だということをベースに進めなければいけません。
- ・ 川崎では子ども権利条例を作っているときに、子どもと大人は社会のパートナーと位置づけました。そのとき、子ども市民、大人市民って言葉が流行りました。
- ・ 子ども市民という考え方。対等なパートナーとして、この社会を構成するパートナーなんだということを位置付ける必要があります。

- ・ 条例第27条に子どもの居場所という条文が入りました。「子どもには、ありのままの自分であること、休息して自分を取り戻すこと、自由に遊び、もしくは活動することまたは安心して人間関係をつくり合うことができる場所（以下「居場所」という。）が大切であることを考慮し、市は、居場所についての考え方の普及並びに居場所の確保及びその存続に努めるものとする。」この条例第27条が入ったおかげで夢パーク作りが始まります。
- ・ 最近、近隣の町長さんともお会いしました。その町も条例作りに向けて大きく舵を切ろうとしています。違う町の議員さんたちも先日視察に訪れました。
- ・ この地域の中でどんどん権利条例をベースにして、子どもの主体的な育ちを保障していこうという動きが出てきています。
- ・ 今年、子ども家庭庁ができて、子どもの意見表明権というのがやたらと注目されるようになってきました。
- ・ 子ども政策には子どもの声を聞く必要がある。当たり前のことですが、川崎で条例を作ったとき、夢パークを作るには、子どもの声を聞いて作ろうということで子ども主体のワークショップを7回開催し、287人の参加、1,725人の子どもの声を聞いて作ってきました。
- ・ 工場跡地だったところをみんなで歩き、学校の体育館に集まり、模造紙に木の模型を立て、この辺に木を植えよう、この辺を土山にしよう、この辺を池にしようとして子どもの声を聞いて作るってことをやってきました。
- ・ さらに不登校支援の場を作る。これが、条例作りの中で見えてきた課題として、権利条例を作っているときに浮かび上がってきました。
- ・ 当時、川崎市内に1,300人の不登校の子がいました。現在2,500人を超えています。この1,300人の不登校の子どもたちに対応できるだけの教育支援センター、つまり適応指導教室が不足している。キャパとしてはその1割程度しかないということが問題になりました。
- ・ しかも発達障がいや知的障がい、統合失調症うつ病のような精神疾患の人、身体障がいがあって車いすで食事の介助が必要な人、こういう不登校の子たちは原則適応指導教室で受け入れてないということが浮かび上がりました。そして、ちょっと髪の毛の色がついているとか、鑑別所に出たり入ったりしている、そんな非行が背景の不登校の子どもも、この教育支援センター（適応指導教室）は受け入れてないってことが浮かび上がりました。
- ・ 結局、こういう子たちはどこが支援するのか、どこの部局も引き取らないで放置されるということがはっきりしたわけです。

- ・そして不登校支援というのが小・中学校で終わってしまう。義務教育では、小学校・中学校には行けなかったけど、高校からは行けたという子どもたちが、高校でも人間関係つまずいたり、勉強がわからなかったりしたら中退してしまいます。
- ・不登校からやっとの思いで学校に行ったのにまた中退してしまうと、今度は長いひきこもりになるリスクを伴います。
- ・だから本当は高校年齢の子たちも通ってこられる支援体制が、この藤沢市内にも必要になってきます。
- ・民間のフリースクール、これは平均月謝3万3000円とされています。東京だとフリースクールの平均月謝4万5000円というデータが出てきました。
- ・こんなにお金は使えない。だからこれは行政課題だ。無料で通える公設民営型の不登校施設を作ろう、という形で川崎では舵を切りました。
- ・そして夢パークを作るときの行政課題、政策の課題として、不登校の子どもたちの居場所をつくるときに、大事にしたことは何だったか。当事者の声を聞くということです。
- ・どんな施設を作ってほしい、でもどんな施設を作られたら迷惑か。市が一方向的に作って与えるのではなく、不登校当事者、子どもと親たちはどんな学びの場、育ちの場を求めているのか。そのヒアリングをしっかりとやろう、ということで、川崎市から私達、当時任意団体であったフリースペースたまりばに委託されました。
- ・私達はアンケートやヒアリングを行い、子どもから103件、保護者から82件の声を集めて、これを市に報告書を出しました。
- ・市に報告を上げた報告書をもとに、夢パーク内において不登校児童生徒の居場所を作るための不登校協議会が立ち上がります。
- ・夢パークというのは青少年教育施設なので、いわゆる社会教育施設です。その施設内で不登校支援を行うということは、学校教育部指導課が入ってきます。生涯学習推進課、人権共生教育担当、総合教育センター、こども権利担当そして民間団体からは、たまりばの私が入って協議を行いました。
- ・ここで、生涯学習推進課の副主幹から出されたレジュメが画期的な内容でした。社会教育の視点に立った不登校支援、つまり、いつでもどこでも誰でも学べる学校教育以外での学習権の保障、学校教育にこだわらない生活からの学び、これを生涯学習推進課の副主幹が提出します。
- ・これを受け取った学校教育指導課は怒りました。1日も早く学校に復帰させるのが教育委員会の使命だ。学校に戻そうというよりは、学校教育にこだわらない、生活からの学び、学校教育以外での学習権の保障とは、何を言っている。これは教育委

員会内でかなりのバトルになりました。民間団体の私が入っているのを忘れているかのように激しい議論になりました。

- ・そしてこのままだと夢パークの中にフリースペースが出来上がらないかなって心配されたときに立ち上がったのが、学校教育部指導課長でした。
- ・夢パークに開設しようとしている不登校児童生徒の居場所は、学校復帰を考えない場所で、その点で教育委員会学校教育部が責任を負う「ゆうゆう広場」とは異なる。学校に行かないことも選択肢として認知するということは、改めて子どもの最善の利益に立つという考え方で、その根本には子どもの権利条例がある。つまり、学校に行けないで苦しんでいる子どもを学校教育の縛りから解放し、いたるところが学びの場だという考え方である。それを川崎として認める必要がある。
- ・これは、当時の指導課長としてはとても勇気のいる発言でした。今から20年以上前に、日本の国策を本当に先取りしたと思っています。今ようやく文科省がこの考え方に追いついてきました。
- ・どんなに頑張っても、行きたくても行けないで苦しんでいるのだったら、学校に戻って来い戻って来いと言っているだけではしょうがないだろう。指導課長も教員出身だったから1人でも多くの方が学校に戻ってほしいのは当たり前。だけど、戻れなくて苦しんでいるのだったら、学校教育以外で学べる、そんな学びの場を、学習権の保障が必要だろうという、まさに私達の取組でした。
- ・1万平米、3000坪の敷地内に、まずプレイパークを整備し、そして建物を建てました。
- ・私の問題意識の中には、不登校の後追いをするだけでは不登校が増え続けるだけ。今、小1から中3までのいじめのピークは小学校2年生です。そして第2位が小学校1年生、第3位が小学校3年生、つまり小1小2小3でいじめがピークを迎える社会です。だから、不登校が増えて当たり前なんです。「学校というところは怖いところ」というところから始まるんです、子どもたちの学校生活は。子どもたちが学校生活などで溜め込むストレス、もう小学校低学年から溜め込む、これを発散させる場と時間と機会が必要だ。そして不登校児童生徒を隔離しない。放課後の子どもたちと混じり合えるような場の必要性を私は当時訴えました。プレイパークを作り、全天候スポーツ広場を作り、毎朝9時から夜9時まで毎日開いています。休みは月1回の施設点検日と年末年始しかしかないです。
- ・こんな場所で子どもたちが好きなだけ寝転がって、ゴロゴロしてゲームも飲食もできるような、子どもたちが「ごろり」と名づけた部屋とか、音楽スタジオも二つ整備しました。

- ・指定管理施設です。5年に一度プロポーザルで選ばれます。ここを市が100%出資している法人である生涯学習財団と我々NPOが共同運営事業体を組んで運営しています。今まで4期にわたってずっと私達の団体が運営をし続けています。
- ・夢パークの特徴としては、冒険遊び場がある。その敷地内に、不登校児童生徒のフリースペースがあります。
- ・私達が市に提案しているのは、子どもの育ちの三要素として、「遊育」遊んで育つという輪と、「学育」学んで育つという輪と、「ケアシケアされて育つ」。この三つの輪の繋がりの中で子どもたちが育つという提案です。
- ・自由な発想で自由に遊ぶ。好きなだけ穴掘っていい、好きなだけ水出して、好きなだけ工具使って、焚き火もできます。
- ・人類は火と道具を使って成長・発達してきたのに、今子どもたちから火と道具を奪う社会になってしまいました。
- ・焚き火もできる木登りもできる。泥遊びもできる、そんな場を用意していく。
- ・子どもたちの時間が削られています。「ゆめパのじかん」という映画ができ、藤沢でも上映していただきましたが、子どもたちが、漢字の時間じゃなくてゆめパのじかん、と映画に書かれたひらがなの「じかん」のなかで過ごす。
- ・大人たちがやらせたい、良かれと思って、はい、算数教室の時間だよ、次は英語教室だね、水泳教室にも行かなきゃ。どんどん子どもの時間を削っていきます。
- ・私達夢パークの合言葉。大人の良かれは、子どもの迷惑。
- ・子どもたちに自分がやりたいことに挑戦できる環境を用意しよう、ということで、やってみたいことに挑戦できる、何もしないことも保障されるようなじかんと空間を用意していく。木に登りたいから登らせてほしい。落ちて骨折しちゃったらしょがない。自分がやりたかったんだから。怪我と弁当自分持ち。自分で責任とるから、あなたのせいだと言わないから禁止にしないで。こういう子どもの声を聞いて作ってきました。
- ・この間も校長先生が質問されました。これって、なぜ学校でできないんでしょうね、と。いやいや、その気になったらできるんじゃないですかとお答えしました。実際には校長先生が持っている権限というのはものすごく大きなものがあります。
- ・誰に気を使うのか。一般の市民や親から、怪我と弁当自分もちなんていい加減なこと言わないで、うちの子が怪我したら学校が責任取れ、そう言われるに決まっていると思って、学校では禁止、禁止と、やりたいことをやれないようにしてしまいました。そこでいろいろな施設でもそうになりました。

- ・ だけど本当は子どもたちのストレスの原因は、大人から、やるな、危ない、うるさいといわれることです。遊び場を奪われたことによってストレスを溜めているわけです。だから、やりたいことに挑戦できる環境を手に入れる必要があります。
- ・ 遊びが持っている力として非認知能力というものが注目されるようになりました。数値化されない力、人間として生きていく力を育む力。目標に向かって頑張る、人とうまく関わる、感情のコントロールができる、困難からしなやかに立ち上がる。こんな力は教科書読んだって手に入らないんですよ。
- ・ 遊びというものが馬鹿にされ、日本ではあまり価値を置かれないけれども、本当は不登校支援も学校支援も、遊べる環境を取り戻すことは重要な要素です。
- ・ これはこのあいだの7月23日、夢パーク20周年記念祭で子どもたちと一緒に泥遊びをしたときの映像ですけど、大人も本気になって遊ぶ。一緒に子どもと遊ぶ大人たちがだんだん減ってきました。私が子どもの頃は、先生と一緒に遊んでくれました。そういう中で子どもたちが育っていたんだと思います。
- ・ 安心して失敗できる環境作りが必要です。怪我とか失敗を恐れて挑戦すらしないう子どもたちが増えました。本当は、子どもは失敗体験を通じて振り返り、同じ失敗を繰り返さないようにするにはどうしたらいいか、それを学び、悔しさを受け止め、そこからしなやかに立ち上がる力を手に入れていくわけです。
- ・ ひきこもりの人を37年前から支援していると、0、100タイプっていう人が少なくないってことに気づきます。0か100しかない。100できない自分を許せないから外に出られなくなる。60、70の自分を許せない。生きづらいですね。
- ・ 本当はできないっていうことを受け入れられる力って大事。だから学校教育においても100点をめざせ、だけでなく、できないことがあるということを受け入れられる教育の姿っていうのも必要になってくるかと思います。
- ・ 不登校支援というのは、基本的に最も大事なものは親への支援だと思っています。不登校になると、そのままずっと外の社会に出られなくなると勘違いする親たちがあまりにも多い。この親や周囲の大人たちの不安が子どもをどんどん生きにくくさせ、究極のところまで死まで追いやります。だからまず親を支える仕組みが必要となります。
- ・ 去年の1月、「ウワサの保護者会」という番組に出て、不登校と家族という番組で、親の理解促進、親を支えることの必要性を訴えました。
- ・ そしてその4ヶ月後、「おとなりさんはなやんでる」というNHKの番組に出ました。確かこの番組、今日傍聴に来られている方も一緒に番組に出られていたと思いますが、中川翔子さんという不登校経験者のタレントも一緒に出て、ここでもやは

り親たちが繋がり合う親の会の必要性、ホームスクーリングの必要性という、とても大事な視点を出してもらいました。

- ・子どもが登校を渋ったらどうしたらいいのか。これはいきなり叱るんじゃなくて話を聞いてあげてください。いきなり否定的な言葉を使わないでください。
- ・「どこで子育て失敗したのか」なんて馬鹿なことを子どもの前で言っただけは駄目。子どもは、私って失敗作なのか。生まれてこない方が良かった。お母さん困らせている駄目な子、と考えてしまう。こんなスイッチが入ったらどんどん動けなくなってしまいます。
- ・学校に行けない理由、行かない理由は自分でわからないんです。私が37年間に会ってきた不登校の子どもたち2,000人を超えていますが、その子どもたちのほぼ9割は自分が学校に行けなくなった理由がわからない。自分でもわからないから、なお辛いですね。
- ・ようやく注目されるようになってきた感覚過敏という課題もあります。机と椅子がズズッとずれる音で、頭が割れそうになるほど痛くなる聴覚過敏の子だったり、給食の時間になるとトイレに駆け込んじゃう嗅覚過敏の子だったり、最近注目されるようになった香りの害と書く香害、柔軟剤の匂いですね。あの強烈な花の香りの柔軟剤を使いたい子どもたちが増えて親たちは子どもの声に押されて、その柔軟剤を使う、その匂いが教室に充満して苦しくて学校に行けないという報告がどんどん上がるようになっていきます。
- ・誤解を恐れなくて言うと、鈍感な子は学校行けるんです。感覚が過敏な子どもたちというのは、教室内でのあの音と匂いには耐えられない、そういう子たちがいるんだということを、まず当たり前で理解していく必要があります。
- ・体に反応が出ているときは体の声を聞くしかない。お腹痛い、頭痛いというのは当たり前。わかりやすいチックという瞬き、咳払いばかりしている症状とかね。
- ・この間、先生の無理解から不登校になった子がいました。音声チックが出ている。緊張してくると、アッアッアッと声が出ちゃう。それを先生は叱責しますね、「授業を妨害するな、うるさいんだ、さっきから」、「いい加減にしろ、教室を出なさい」。それを聞いていた他の子どもたちからも暴言を受け、とうとうその子は不登校になってしまいました。先生に音声チックの理解があれば、不登校に追い込まれないでも済んだわけなんですけども。そんなところから不登校になった子どもたちがいます。
- ・昼夜逆転だって意味があるんですね。素人ほど生活リズムを整えなさいっていうことだけを言う。そうやって説教する。これって一番説教しやすい言葉だからです。

そして間違っていないからです。それは生活リズムを整えられるに越したことはないでしょう。でも、生活リズムが狂っていく子にたくさん出会ってきました。今フリースペースに来てる子も多くは、この昼夜逆転を経験している子です。真面目な子もいっぱい、昼夜逆転します。だって制服を着ちゃいました。朝ご飯食べ終わっちゃいました。カバンの中も全部揃っちゃいました。あとどうすればいい。子どもを待ち受けているのは学校行くことだけです。勇気を持って玄関開けて足を踏み出せばいいだけです。当たり前のことです。ところがこの当たり前のことができないから苦しいんです。足が鉛のように重くなって動けない。子どもは自分をすごく責めるんですね。私ってでき損ないだ。生まれてこない方が良かった。生きている価値がない。みんなが学校行けるのに、私は足を踏み出せない。もう全部準備できているのに。私なんて生きている価値がない。発狂するところまで追い詰められたときに、人間の体ってよくできているなってことを教えられてきました。朝起きられない体を作り出してくる。朝起きられない体を作り出すことで、メンタルな病気を発症することを防いでいるなっていう、そういう事案にいっぱい出会ってきます。

- ・ 今何時だろう。3時、3時で外が明るいってことは、昼間の3時。昨日お母さんに明日は絶対行くって約束した。だから朝まで起きていた。いつ寝ちゃったんだろう。今からどんなに頑張ったって間に合わない。しょうがない、今日も休むとするか。やっとこの状態まで来たときに、自分を受け止められる、受け入れられる。学校休むってことを受け止められる。
- ・ これで気が狂うって思っていたこの状態から脱出することができる。行かないと決めてからは楽になって、また夜遅くまでゲームとYouTubeを見るから、この負のスパイラルで朝起きられなくなる。よくあることです。
- ・ だけど、この子は大丈夫だ。今は昼夜逆転をしているけど、君が学校行きたい、高校受験したいと思ったらちゃんと起きられるようになるから心配ないよ。本当にそうなんですね。見事にみんなこのときはっていうときに、ちゃんとその日に子どもは調整してきます。
- ・ ゲームを取り上げて、子どもが学校に行くなら簡単ですよね。そんなことではないです。「おとなりさんはなやんでる」の中で、不登校経験者もいっぱい語ってくれました。中川翔子さんも語ってくれました。ゲームがあったから命を繋げられた、ゲーム取り上げられていたら死んでいた、と答える子どもたちがいっぱいいます。命を繋ぐコミュニケーションツールでもあるってことを、学校現場の教員も親たちもしっかりと手に入れる必要があります。

- ・ もう一度言うと、このままの状態が続くわけじゃありません。
- ・ 親の不安に寄り添って親を支えてあげなければ親が子どもを追い詰めてしまう。大人が子どもを追い詰めてしまいます。
- ・ 学校の教員研修に私が必ず言う言葉です。不登校の子どもを学校嫌いな子どもたちって勝手に決めつけないでください。
- ・ あの子は学校嫌いで困ったもので学校に行きたがらない。本当に学校が嫌いで困った。なんていう話をたくさん先生から聞いてきた。でも全然違う。私が出会ってきた子どもたちが口を揃えて言う言葉、学校が安全で安心して楽しく学べるなら学校に行きたい。これは不登校の子どもたちの心の叫びですよね。そこが安全で安心して楽しく学べる場所だったら、みんな学校行きたい。でもそこが安全じゃない、安心できない、楽しくない。だから行けなくて困っている子たちが不登校の子どもたち。ここの認識を、学校現場の先生たちは変えていく必要があります。
- ・ 早く学校に出ておいで。学校に出ておいでって言うけども、先生、私が休んでいる1年間の間に学校はどう変化したんですか。何も変わってないのに、私に出ておいでってことは結局、私が悪いっていうこと。みんなは学校に来れるのに私は学校に来れないんだから。みんなと同じように根性入れて、学校ぐらい行ける子どもになればいいって思っているのでは。そう思われたら子どもたちが動けないです。
- ・ 学校に来れないで苦しんでいる子どもに共感して寄り添いながら、苦しいね、辛いね、どうしたら君が来てくれる学校にできるか、先生も一生懸命考える。だから教えてね、先生もやれることを努力してみるよと、そちら側に寄り添えば子どもの考え方は少しずつ変わってきます。
- ・ 小学校も中学校もいけない、高校も大学も行けない。どうやって働いてどうやって生きていくんですか。親も子どもも不安です。
- ・ 不登校児童生徒を支えるのに大事なことは、不登校は駄目じゃないってことをしっかりと理解する。文部科学省の局長通知にあるように、不登校を問題行動と捉えてはいけない。不登校児童生徒が悪いという根強い偏見を払拭してください、と文科省の局長が通知で出しています。どこにも不登校って悪いって書いてないのになんでみんな悪いって勘違いするんでしょう。そこから抜けきれない、この空気感が子どもを苦しめているし、親も追い詰めている。あの時間は自分にとって意味がある時間だったと思えるように、支えてあげたらいい。“大丈夫”の、安心の種をまけばいい。
- ・ 先ほどもご紹介あったように教育機会確保法ができました。どこで学んでもいい。地方公共団体は、学校に行けなくなった子どもたちが、地域で学べる環境を用意す

る、これが自治体の務めです。そういう方向に支援していかなければという法律ができました。

- ・私もフリースクール等検討会議の委員として国の会議に出ていました。そのとき文部科学省の課長が言いました。タブレットを取り上げて、今学校に行けないで一歩も外に出られない子どもがいます。増えています。その子が在宅でタブレットを使って学習してその学習履歴を、校長先生のもとに届けます。そうすると、校長先生がその学習履歴を確認して、学校行きたくても来れなかったけどよく勉強したね。これをもって学校の出席として認めましょう。一歩も家から出られない在宅学習をしている子ども、これを学校の出席として認めますと校長先生が言っている。こういった話が増えています、とその課長が言いました。そして文部科学省としてはそれを積極的に推奨しますと言いました。
- ・新型コロナが流行したこともあり、既にオフィシャルに1,000件を超える子どもたちがタブレットで学習したことをもって、学校の出席になっています。
- ・川崎市教育委員会も市販の学習アプリを、不登校の子どもたちに貸し出ししています。お金がかかるこういったタブレット学習を、川崎市教育委員会としてはそのアカウントを配って、どうしても家から出られなかったらこれで学習していいよっていう仕組みを今作っています。
- ・国がモデルにも使うようになったフリースペースえん。日本で初めての公設民営のフリースペースです。ここの特徴は毎日お昼ご飯を作る台所がフリースペース内にあることなんです。
- ・私は一貫して言い続けてきた。ご飯作って食べるだけで不登校の子が元気になる。
- ・でも多くの自治体はそれを実現してきませんでした。冷蔵庫がある食器棚がある、ちゃぶ台がある。そこで学習している子もいて、隣で楽器の演奏している子もいて、その隣で一日中ゲームやっている子もいて、その隣で絵を書いたり、物作りをしたり、パソコンやったり、本を読んだり、相談したり、たったこれだけのカオスのような空間の中で子どもたちがどんどん育っていきます。
- ・先ほどの条例づくりのときの課題を受け入れて、あらゆる障がいの子どもの受け入れを行っています。
- ・そして会費はただにする。これも大事なことです。会費が払えない人たちがいっぱいいるんですね。
- ・藤沢では小学生の子どもたちが来られる場所を増やしてきた。いい傾向です。今までの適応指導教室は、ほとんど中学生主体だったんです。小学生が来られる場っていうのは公的にオフィシャルに本当に必要です。

- ・そして、できれば高校年齢の子たちの支援も併せてやれるようになると、ひきこもりが減っていくことになります。異年齢が混ざり合うインクルーシブな場にするのが、実は安全安心な居場所になります。
- ・不登校の子どもたちと、車いすで食事介助の必要な子が一緒になると、教育委員会としてはそんなことできませんよ、これ予算の出所が違うんですとか言って、不登校の子どもたちが通ってくる教育支援センターには、重い障がいの子を受け入れないってことが、一般的になっています。
- ・でも違うんです。本当にこんなに人間の命って多様なのかって、子どもが会おうと俄然元気になるんです。本当にちょっとこの子を支えてあげたらその子が喜んでくれた、不登校の子どもたちが誰かの役に立ったと言ってすごく元気になってくる。そして、障がいのある子どもたちも自分を支えてくれる子どもによって元気になってきます。
- ・インクルーシブな場を持っていくって大事です。私達は生きている。ただそれだけで祝福されるっていうのを言い続けてきました。生まれてきただけで奇跡。生きているだけで奇跡。だから学校に行けるとかいけないとか、勉強できるとかできないとかそんなことは二の次なんだと。これを言い続けてきたら、いつの間にか国の考え方も少しずつ変わってきました。目先の学校復帰のみにこだわらず、長いスパンで見て将来的社会的自立をめざすそうです。
- ・将来的社会的自立をめざせばいい。そこで私達が大事にしているのは毎日のお昼ご飯作り、もう32年間ずっと毎日お昼ご飯を作って食べています。1日30食も40食も作ります。子どもたちと一緒に作ります。別に義務じゃない当番制でもない。作りたい子が、大人と一緒に作ります。
- ・先ほど市長から子ども食堂が増えているって話もありました。全国に7,000ヶ所以上になりました。その子ども食堂が支援ネットワーク会議を作って全国に子ども食堂を広げようとした、その第1回の基調講演って私がやっているんですよね。だって私達毎日お昼ご飯作っているんですから。それほどやっている子ども食堂ってどれだけ日本にありますか。毎日子どもたちと40食作る子ども食堂です。
- ・美味しい、嬉しい、楽しい、で繋がる。1人じゃないを実感する。作ってくれた人ありがとうって声が飛び交う。こんな中で、ご飯をよそっただけで感謝された。人の役に立ったという経験から、自己有用感が生み出され、子どもたちは元気になっていきます。
- ・何もしないことを保証する必要がある。不登校ひきこもり支援というのは、この孤独・孤立を解消するための民間の地域の居場所に必要なのは、何にもしないってこ

とを保障すること、支援目標なんか立てない。いたいようにいられる場、弱さがさらけ出せる、正しくもない、大して重要でもない無駄話ができる仲間や空間が大事です。

- ・教育関係者が不登校支援をやろうとするとすぐに指導が入ってきます。かわいそうだね。君ずいぶん遅れちゃったね。しっかり他の子に追いつけるように、何年生の勉強から始めよう。さあ頑張ろう、みたいな場を作りたがってしまう。これがどんどん引きこもりを増やしている。私達が経験してきたこと、指導とか支援のにおいから若者は遠ざかる。かわいそうな君を助けてあげたいっていう大人たち。その大人たちの目線。さあ、私が君たちの味方だよ。私のもとにおいで。こういう気配を感じると子どもたちは支援から逃げていってしまいます。
- ・これもずっと言っているけど受け入れてもらえない。何もしないってことは本当に大変辛いことですが、すごく大事なことです。何か指導する方が簡単なんです。だけど、何にもしないってことから生み出される力っていうのがある。この写真に写っている青いTシャツを着てゲームをやっている子がいます。これ、文部科学省の職員研修に使った写真です。昼間からゲームをやらせていていいのかって皆さん思うでしょう。
- ・でも、彼の心の中まで読めますか、今頃みんな方程式とか勉強しているかな、英語を勉強しているかな、自分は家でもゲーム、ここでもゲームしかしてない。生きている価値ない。死んだ方がいいんじゃないか。そう思いながら、かろうじてゲームで自分をごまかしているかもしれない。でも、その子の「今だ！」というのがきくと来ると信じて、その命に寄り添うしかないんですと、文部科学省の研修で私が言った言葉です。
- ・後日談ですが、この子は小学校中学校、ゲームとサッカーしかしないままフリースペースで過ごしました。でもみんなが定時制高校に行くとき聞いて自分も高校に行ってみたいと言って、自分の名前を書く練習と受験番号の数字を書く練習をして、定員割れしている定時制高校に入った。そしたら、文字が読めるようになって楽しくなってRPGゲームも楽しくなって、それで勉強するようになった。高校4年間で勉強が面白くなっちゃった子です。結果として彼、大学行きたいって言って1年浪人して早稲田大学教育学部に入っちゃった。文部科学省の研修でこの写真使ったときは、この子がそんな大学に行くようになるとは思ってもなかった。ゲームとサッカーしかやっていませんでしたよ。この子が「世界一受けない授業」というテレビに出て喋ったことは、フリースペースにいる間、勉強嫌いにさせられなかったことが何よりもありがたかった、と語ってくれました。

- ・私達が本当はテレビ局のディレクターにこの子を取材した方が面白いよって言った子は、ビーフジャーキーの帝王と呼ばれた子なんですけど、夢パークにいる間ビーフジャーキーばかり作っている子でした。そしたら、ビーフジャーキー作るのがうまくなっちゃってね。みんなからうまいうまいって言われて自信持って、自分にも人の役に立つことがあった、というところから定時制高校から大学に行きました。
- ・背中を向けている子は、学校行かないで釣りばかりやっていた子です。釣りばかりやっている間に魚さばくのがうまくなって、結果として15歳で形式卒業した後、全国チェーンの居酒屋に引っ張られて、店長になりましたね。今3人のパパです。
- ・彼が不登校親の会に来たとき、何で店長になれたのか、いつ勉強したのか、と聞くと、働くようになったら仕入れとか言われて、仕入れって何、儲けて何、計算って何っていうところから自分でやるようになった。今は店長だから、人事の勉強で法律まで勉強しなきゃならないんだよって。笑いながら言っていました。
- ・人はちゃんと自分に自信を持って、こんな俺でも役に立つ、生きていていいと思えたら、ちゃんと社会の中で自分で勉強していく。そこを信じられるかどうかだけです。
- ・この子も面白かったですね。西宮で出会った子です。私が西宮の講演会で呼ばれたときに、小学校6年生で鯛をさばいているんですよ。この左下の写真は彼がさばいた鯛の刺し盛りです。見事でした。彼は小学校3年から不登校で小4から小6までYouTubeを見て1人で魚のおろし方を勉強して、刺身ができるようになったそうです。すごいことですよ。この子はちゃんと生きていく力を持っていると思います。
- ・この間、教育関係者と話しましたが、昔は例えば、魚屋の子は魚に関する知識があればよかった。なのに、いつの間に何でもかんでも全てできないと人間として認められない社会になってしまったのでしょうか。
- ・とりあえず、子どもたちの出会いになるようなきっかけになるような講座は用意しています。全て無料です。劇団四季のライオンキングの初代パーカッションистがもう20年間、毎月来てくれている。南米フォルクローレの演奏者が来てくれる。役者さんが来てくれる、ダンスの講座もある、アートもある、歌もある。極めつけは89歳の現役の先生が来てくれています。平林先生、“平セン（ひらせん）”と呼ばれています。

- ・小学校一年生から不登校であった少年が平センと出会っただけで、科学って面白いって言ったものの学校には行かなかった。とうとう日本の学校行かなかったけれど、この子、アメリカに渡って今、アメリカの大学で物理を教えるようになりました。
- ・平林先生に聞きました。「平セン、学力って何ですか」。先生、目を閉じてゆっくり目を開いて、「出会いをものにする力ですかね」と言ってくれました。しびれるような言葉でした。
- ・私達は、すぐに子どもたちに何かをやらせようとする。「ゆめパのじかん」をご覧いただいた方はご存じだと思うけど、冒頭は蟻の巣を追っかける少年のシーンから始まります。一日中蟻の巣を追っかけていてもいい、穴ほじくっていてもいいっていう環境、私達どれくらい用意できているでしょうか。そんなことやる時間があったら、部屋の中に入ってきて算数を勉強しなさい、どんどん遅れるぞとか言ってしまるのが私達ではないでしょうか。
- ・今、これが面白いんだ。この面白いと思ったことをどんどん掘り下げていくっていう、その環境さえ用意してあげれば、不登校の子どもたちだってぐんぐん伸びていきます。なのに、何年生の勉強から遅れているから、ここからやろうねって言われるとやる気が起きてこない。伸びていこうとする子どもの邪魔をしない、好奇心の芽を積まない。私達が肝に銘じることはこれだけでいいです。
- ・一人ひとりが必要だったらその学習支援ももちろん行います。大学生のボランティアも入っています。子どもたち同士でも教え合います。
- ・学校とフリースペースで連携しています。過去20年間には、藤沢から通って、善行から通ってきた子、長後から通ってきた子もいます。全て学校の出席として認められています。校長裁量ですけども、学校の出席となって、みんな通学定期で来ていました。学校・フリースクール連携協議会というのは、私達が県教委に働きかけて、17、8年前に作ったんですね。これが日本で先駆けの連携協議会。不登校相談会、進路情報説明会も一緒に開きます。極めつけは、学校の先生が1年間派遣で送られてきます。今年の3月までは鎌倉の小学校の先生が1年間、私達のフリースペースで過ごしました。
- ・ついこの間まで八丈島キャンプに行ってきました。5泊6日で子どもたちが俄然元気になるります。スキー合宿にも行きます。
- ・私が国に働きかけて作った制度を川崎市は取り入れてくれています。就学援助家庭の子どもはフリースペースまでの交通費が補助されます。体験合宿費も補助されます。だから、生活困窮家庭の子どもたちでもスキーにも連れていける。八丈島まで

船に10時間揺られて行って、海に潜ったり、綺麗な海で泳ぐこともできます。こんな体験ができるわけですね。

- ・居場所の中でこんな私で大丈夫っていうのが充電されたら、来ている子どもたちのほとんどは学校に行っちゃいますね。ほぼ全員高校進学してしまいます。だから何の心配もないってことね。小学校中学校行ってなかっただけで、別に僕ら高校に入ることがゴールだとも何とも思ってないです。でも結果的に子どもは自分で欲が出てくると、高校に行きたくなる子が多いですね。
- ・親を支えるために3種類の親の会もやっています。フリースペースえんの保護者会など、たくさん親たちが隔月で話し合います。いろいろな難しい課題を抱えている人たちがいるから、保護者会終わったら飲み会もセットしていますね。飲み会なら来られるという父親たちをしっかりと取り込んで、不登校親父の会なんかもやっています。父親が支援の側にまわってくれないと子どもが命を落とします、追い詰めますから。だから父親たちにもしっかりと不登校を理解してもらわなければいけません。
- ・そしてグループ別相談会というものも隔月でやっています。子どもの年齢別にわかれた不登校の相談会で、スタッフが四つ五つくらいのグループにわかれて、各グループで悩みを話し合います。
- ・常時、親を支え続ける必要があるというケースの場合は「親の会たまりば」に参加してもらい、親戚づきあいのように一緒に育ち合っていきます。
- ・インクルーシブの育ちの場でもあります。筋ジストロフィーの子が車椅子から手が落ちちゃったら、自分の力で戻せません。通りがかりの小学生が拾ってあげます。ありがとうございます。ウィンウィンですよ。こうやって子ども同士と一緒に育ち合っていくのです。
- ・発達障がいの方、職員研修を児童精神科医から受けてます。多動の子は問題児でしょうか？この精神科医は言います。人類はみな注意欠陥多動のDNAを持っている。長い何万年もの歴史の中で、向こうから襲ってくる外敵に身を備えて、常に多動だったはず。弓矢を作り、槍を持ち、向こうから襲ってくる外敵に備えなければ自分たちが殺されてしまう。でもここに来た小動物は捕まえて食べる、こうやって私達は生き残ってきたんだ。何万年もの歴史があって、そして最後の150年で私達の生活が劇的に変わりました。
- ・なぜか6歳になった途端に手は膝の上、お口チャック、先生見て動いちゃ駄目、喋っちゃ駄目。学校という教育制度のもとで、子どもはじっとしてなきゃいけない、

動いちゃいけない、多動の子は障がい、というラベリングをされ、特別支援という名のもとに隔離されるようになっていきます。おかしくないですか。

- ・ 私達のDNAに多動が組み込まれている。今から5,000年前1万年前にじっと座ってなさいと言われたら、人類は死に絶えているはずです。つまり今の社会のニーズに合うか合わないかだけ。150年前明治政府が富国強兵政策のもとで強い軍隊を作る必要があったからできた学校教育制度のもとで、それに合わない子どもがいても今はおかしくない。人類は月まで行って、石まで持ち帰りました。スマホで地球の反対側にいる人と顔を見ながら会話ができる時代になりました。なのに、学校教育制度だけは150年間変わっていません。
- ・ 本質的な問題が問われているんだと思います。私は東京都の総合教育会議に呼ばれました。小池都知事に、そして教育長や教育委員の皆さんの前で、私は何を喋ろうかすごく迷いました。そのときに使ったパワーポイントがこの下の部分です。
- ・ この子は東京都から夢パークに来た子です。学校一の問題児と呼ばれて、学校追放処分になりました。君みたいな多動の子に来られたら学校が迷惑だ、他の子がどれだけ迷惑しているか君はわかるか、君はこの学校に来ないでくれ。憲法違反のような案件で裁判して戦えば勝てるようなケースでした。でももう親子は裁判なんかしたくない。だから、ここに居させてくれと言いました。私はスタッフに指示を出しました。この子の一番光るところ、得意なところに光を当てよう、いいところ探しをしよう、と。
- ・ あるとき、この子がペンキ塗りをしているスタッフの刷毛を取り上げて、走り回っているのが目に入りました。そしてプレイパークの小屋にどんどんペンキを塗っています。生の木までペンキを塗っています。生の木に塗られると木が死んでしまうので慌てて木材を配って、ここなら好きなだけ色を塗っていいよ、とペンキを渡しました。そうしたら来る日も来る日もニコニコとペンキを塗り続けます。だんだんとこの子の情緒が安定してきます。そして、大人たちも近寄って彼に声をかけるようになりました。将来アーティストになれるね。こうしている間に、この子はすっかり情緒が安定して、何と学校一の問題児と言われた子は、普通に高校から学校に戻って行きました。
- ・ そこで私は、この案件を元に小池都知事と教育長に話しかけました。この子は困った子じゃなかったですよ。困っている子だったんですよ。この子を学校不適応児だとラベリングするのは大変失礼な話です。一人ひとりの子どもに適應できない、これが学校教育の課題ですよ。一人ひとりの背景やニーズに合わせた多様な

学びと育ちを保障する環境を作るのが、これからの東京都の教育ではないでしょうか。

- ・私が呼ばれたのは教育大綱を決める最重要会議でした。有識者2人のうちの1人として呼ばれました。つまり、本質的には小手先のことじゃない。一人ひとり、この子どもを不登校児童生徒にするのか、子どもの命に寄り添ってこの子の一番いいところを探してあげるか、この発想の転換だけで子どもたちは大きく変わっていきます。
- ・私達の取組は、医学モデルじゃなくて社会モデル、障がいは体の内側にあるのではなくて、外側にあるという考え方。この人を直そうとか治療しようという見方ではなく、社会の方、環境の方を変えていく。
- ・これは自閉症スペクトラムの子の作品です。見事な切り絵をします。本当に豊かな動物を切り取ります。本当にいる動物、過去の恐竜、そして未来の動物のように、彼のアートのセンスで豊かに切り取ります。本当にかわいらしい作品が切り取られていると思いますが、これ、お母さんは困りごとを言っていました。この子が図鑑を買ってくれて言って高額の図鑑を買ってあげるのはいいいんだけど、切り取っちゃうんですね、と。本当に高い図鑑を切り取っちゃう。でもお母さんがあるとき気づいた。こんな動物がいるわけじゃないから想像上で切り取っている。絵を描いて切り取っているわけでもない。ただいきなりハサミを持って切り取っていく。どこにどの色があるかまで考えて切り取る力を持っている。すごい力ですね。そしてこの子は粘土で小動物作るのも得意なんです。ある時ガムを吐き捨てて怒られた、ガム拾いなさいって言ったら、拾ったちっちゃなガム1個で3体の恐竜を作りましたね。
- ・本当にすごい力を持った子どもたちがいる。この子どもが出たのが、NHKの「ドキュメント72時間 どんこパーク雨を走る子どもたち」という番組でした。今日ご参加の中で、夢パークを扱ったこの番組をご覧になった方はどれぐらいいらっしゃいますか。（挙手あり）
- ・ものすごく反響のあった番組です。72時間の取材期間がすべて雨だったのですが、子どもたちが、雨の中でも外で遊びました。この女の子は座っているのが苦手で、もう学校が嫌で嫌で、消しゴムをちぎって投げてばかりいた。その子のお母さんが隣に写っています。この子がいろんなことをやらかす。でも予測できないことを楽しめるようになってきた、と。親として受け止めができてきたんですね。
- ・あまりにも見事な言葉をお母さんが使ったから鷲田清一さんが朝日新聞の一面に書いている「折々のことば」にこの言葉が紹介されました。

- ・そして先ほどのこどものお母さんがこの方です。この子は本当にいろんなことをやらかしちゃう。夢パークに来た親子のお弁当を急に取って食べちゃったりするんです。だからお母さんは、このまま2人で消えてしまいたいなとか思ったこともいっぱいある。一緒に死んでしまおうかと思うほど、この子は世間に迷惑をかけている。本当にどうしたらいいんだろうと悩んでいた。ところが夢パークに出会って、この自分の心を一番楽にしてくれたのは、このままのこの子が素敵だよっていう、そういう人たちの眼差しだったってお母さんが語るんですね。ずっと自分はもう死んでしまうかと思ったぐらいだったのに、ここに来たら子どももスタッフもみんなが「今日何して遊ぶ」、「何作る」って言うってくれる。それに出会ってから、もし生まれ変わったとしても、私の息子で生まれてきて欲しいなって思う。と、感動的な言葉を喋ってくれました。
- ・この番組は9月2日に放送され大反響となり、去年の暮れ、2022年の12月30日に放送された「あなたが選ぶ、もう一度見たいドキュメント72時間」のベストテンを選ぶ番組で、なんとまさかの第1位に選ばれました。日本人の1,000万人以上が見たと言われています。再放送は6回を超えました。
- ・極めつけだったのは、ベスト1に選ばれたときNHKはこのお母さんを局に招きましたがお母さんが断り、代わりに手紙を書きますと言いました。そのお母さんの手紙の内容が感動的でした。
- ・たまたまこの放送を見た学校の先生が、「悔しい。本当に悔しい。彼を不登校児童生徒にしてしまった。なんで私達学校は彼に対して何もできなかったのか。彼がこの放送で生き生きとしている。そしてお母さんが、生まれ変わっても私の子で生まれてきて欲しいとまで言えるようになった。フリースペースえんの取組に、何があるのか。学校の教員として悔しい、教えてほしい。」とお母さんに電話したそうです。そこでお母さんに「先生たちがいつ見に来てもいい。ここの取組の全てを見てもらったらいい。」と伝えてもらいました。そしてここでの取組を見た先生たちが学校に帰って話し合いをしました。校長先生が学年だよりを書きました。
- ・この番組がベストワンに選ばれたときのお母さんの手紙の締めくくりは何であったか。「学校が変わったんです。先生たちが変わったんです。だからうちの子、今、週に2日学校に通っています」。
- ・学校って変わるんですよ。なぜ不登校の子は学校に来れない困った子になってしまい、どうしたらいいですかねって言っているんでしょう。学校が変わる。どうやったらこの子のありのままを認めてくれる学校にできるか、そこをしっかりと学校が取り組もうとすれば、校長裁量だけでも十分学校が変えられます。

- ・私達の場所は、現役の文部科学大臣が初めて訪ねてきた場所、つまりフリースクール・フリースペースというところに初めて足を踏み入れた場所でもあります。文部科学大臣は私達のところに来てすぐにコメントを出しました。既存の教育では収まりきれない子どもたちが育っていく可能性がある。教育をより柔軟で多様な発想に持っていかなければと改めて思いました。未来の学校のあり方のモデルの一つがここにあります。
- ・どうか、どんどん教員の方に見に来てほしい。神奈川県为学校・フリースクール連携協議会で、私達はいつでもいいから申し出てくださってと言っています。そうしたらそれ用に私がちゃんとプレゼンして先生たちに取組を伝えていきます。
- ・文科大臣をして、ここが学校のモデルだって言っています。寝ていてもいい。一日中ゲームやってもいい。穴掘っても木登りしても焚き火やってもいい。そんな場所がなぜ未来の学校のあり方のモデルになるのか、そこを支えていくベースの考え方だと思います。
- ・不登校支援で大切なこと。答えは一つじゃない。正解は一つとは限らない。その子が動き出すタイミングを待つ。本人がその気にならないと動かない。急がば回れ。希望を見ていきましょう。できないことに注目するのではなく、できるところに光を当てる。そして多様な選択肢を用意していけばいい。ただそれだけのことです。
- ・親が早く学校に戻したいと思っているうちは、子どもは動きません。口で学校に行かなくてもいいよって言っても目が笑ってない。毛穴から行ってほしい、がにじみ出ている。それを子どもに見透かされてしまうんです。親が「生きてさえいてくれればいい」と心の底から願ったら、不思議と転機が訪れます。いつの間にか子どもが自分から動き始めるんです。子どもが安心できる居場所の中で“大丈夫”に包まれると自然と欲が湧いてきて、自分の頭で考えて自分の足で歩き始めます。だからシンプルなことを私は32年間言い続けてきています。
- ・T o D oよりもT o B e、何をするとかできるではない。ある、いるに光を当てる。生きているだけでOKなんだよ、すごいことなんだよ。生まれてくれてありがとう、あなたがいてくれて幸せだよ。親がこれを子どもに届けられればもうこれだけで十分。
- ・でも親がどうしてもそれができないときもある。それは親に代わって第3の大人がこれを伝えていってあげればいい。不登校になっただけで、死んだ方がマシかと思っている子どもたちがいっぱいいる。死なせていいんですか。子どもの命にしっかりと寄り添えばいい。

- ・いつの間にかもう私達のところには、不登校だった子どもたちが親となって子どもを連れて訪ねてくるようになりました。32年間やっているとは本当にたくさんの元不登校児たちがもう親となって子育てをしています。何の問題も起きてきません。
- ・ちょうど1時間となりました。私の方からはひとまずこれで終わらせていただきます。ありがとうございました。

## 鈴木市長

- ・西野先生、有難うございました。皆様から拍手をお願いします。
- ・質疑応答ということで、委員の皆様からいろいろ聞きたいこともあると思います。また、西野先生にだけではなく、教育指導課へのご質問もあれば、遠慮なくお願いします。

## 種田委員

- ・ご講演ありがとうございます。私が本当に驚いたのは、教育指導課さんのお話は学校に戻ってきてほしいというのが根底にあるように感じましたが、西野先生の場合はそうではなかった。子どもたちのことを考えると、そのほうがいいのではないかなと思います。自分から戻っていけるような状況になるといいなと本当に思いました。
- ・何もしないことが不登校の子どもたちに意味があるということ、今日のお話を聞いて、たくさん考えさせられました。いろいろ本当に素晴らしい言葉をいっぱいいただいたような気がします。感想で質問ではございませんが。どうもありがとうございました。

## 市村委員

- ・本日はお話ありがとうございました。5年以上前ですが、市と県のPTAの団体に所属していたことがあり、西野先生のお話は講演会等で聞かせていただいております。今回もいろいろ考えさせられるお話をたくさん聞けたなと思っています。
- ・以前、PTAの団体をやっていたときに不登校と定義される子どもたちの保護者の皆さんを対象に情報交換会などを開いたことがありました。そういった場でお話を聞いていると、保護者の方々も1人や夫婦で悩んでしまい、話をできる場がなかったといった感想を話されていたので、そういった機会を作らなければいけないなと思いつつも、PTAに所属している期間は期間限定になりますので、そういった機会をあまり作れなかったなという反省をしました。私も、周りの保護者の人から子どもが不登校でという話をいただくことがあるんですけども、どのように寄り

添ってあげたらいいのか分からず、話をただ聞くことしかできなくて、どのようにそういったお子さんを抱える保護者の方の支援をしてあげたら、何ができるかというところで、もしアドバイスがありましたらお聞きしたいと思います。

- ・ 今日いろいろ大切だなと思う話をたくさん聞かせていただきましたが、その中でも印象に残ったのが、学校不適應児ではなくて子どもに適應できない学校教育が課題なんだ、というところがすごく心に響きました。そのような視点を持って子どもたちにどう居場所を作ってあげられるかと考えることが非常に大事であると思いました。

## 西野氏

- ・ 子ども家庭庁ができて、意見表明権が取り沙汰されて子どもの声を聞くって言うんだけど、なかなか子どもの声を聞ける大人が育ってないんですよね。子どもは自分の話をしっかりと受け止めてもらえる大人と出会えて初めて、自分の問題と向き合うことができる。だから、どこまでも傾聴というか、その子が話したい通りに思いを受け止めようとしてそばにいられるかだと思います。ついつい私達は答えを出してあげなくてはと思いがちです。こんなに大変だってつらかったなら、こんなことしてみたらどうか、ついつい何か答えを用意してあげたくなる。だから私達は、ただただ思いを受け止める、声を聞こうとしてそばにいただけということを大事にしています。
- ・ 悩みがある人は相談室に来ておいで、臨床心理士、公認心理師が待っているよ、みたいなこと言われても、子どもは来れないんです。知らない人にはよほどのことがないと自分の悩みは簡単には相談しない。知らない大人に自分の一番つらいことを簡単に話せないです。
- ・ 子どもの相談のことを僕らは「発見する相談」と呼んでいて、子どもの異変に気づいていく、お腹をすかしているな、イライラしているな、同じ服着て風呂にも入っていないなとか何かいろんなところから子どもの今置かれているSOSを発見していくってことを大事にすると同時に、「ながら相談」と呼んでいる、お茶飲みながらとか、お菓子食べながらとか、料理しながらとか、を行っています。
- ・ 夢パークの400m周回道路を一緒に歩きながら相談することは結構あります。じっと座って相談しているところを誰かに見られるのも嫌だし、誰かに聞かれるのも嫌。だけど歩いていると、通りすぎた時に近くに人がいるかいないかすぐわかる。周回道路をぐるぐる歩きながら、とにかく子どもの声を聞き留めようとする。余計な指導的なものではなく、そばにいたことが大事だと思います。

## 市村委員

- ・確かに全く知らない大人にいきなり聞かれても、やはり話せないところは非常に納得しました。藤沢市でもいろいろ取組がこれから広がっていくと思うので、そこで自分自身に関われるところがあれば、子どもたちに寄り添っていききたいなと思います。
- ・教育指導課の説明の中でお聞きしたいことがあります。本市の不登校児童生徒数の推移ということで、年々人数が増えていることがグラフで説明いただきましたが、これは前年度から引き続き不登校である方もその中に入っているということでしょうか？あと、この令和3年度でいうと中学校が544人、小学校が326人になっておりますが、この中でフリースクールとか学びの場に繋がっている児童生徒がどのくらいいるのかとか、そういった実情がわからなかったなので、状況を教えていただければと思います。

## 教育指導課

- ・推移グラフに使用した数字は、あくまでその年に30日以上不登校の定義に当てはまる数を追っているものになりますので、不登校から不登校ではなくなったお子さんもいると思いますし、そのまま不登校が継続しているものも含まれます。この数値は年度ごとに30日以上休んでいる人数という形で調査している数字を使わせていただいております。
- ・フリースクール等に通っているとか、そこに繋がっているような子たちのお話がありました。毎月学校の方から不登校傾向、また不登校の児童生徒の様子については報告をいただいております。そのなかで可能な範囲で、もしその子がフリースクールやほかの民間団体、ほかの相談機関等や病院等に繋がっている場合がわかる場合には、学校の方からそれも併せてご報告はいただいておりますが、件数までは承知しておりません。

## 市村委員

・年々増えているので非常に重要な問題で、今後いろいろ考えていかなければいけないというところがありますが、その不登校だった児童生徒が取組のおかげで不登校ではなくなったという事例もたくさんあるかと思っておりますので、そういう良い事例を今後知っていききたいなと思いました。

## 石井委員

- ・自分の子育てを鑑みますと、おかげさまで2人の息子は、何とか無事に社会に巣立っていきましたが、振り返ってみると、言ってはいけない言葉、してはいけないことを多々してきたなと反省しております。そんな状況下においても育てくれた子どもたちに改めて感謝をしたりしていました。私の子育ては終わってしまったんですけれども、先生の今のお話を伺いながら、また今後そういったことをこの教育委員という立場を通して還元していけたらと思っております。
- ・自分は小さな医院をやっていますが、患者さんのご両親から、子どもがどうしても話をしてくれなくなったので、携帯を買ってきましたから先生が話してくれませんかと言われて、どうしたらいいのかもわからず、そのお子さんと携帯で繋がったりしたこともありました。だけど、ろくなこともできずその子はご両親と遠くに引越してしまったのですが、そのときにもう少し寄り添えるような存在であったらなと、思いをはせたりいたしました。
- ・今も外来などしておりますと起立性の調節障がいのお子さんとか、ご両親と相談にいらっしやったりしていて、本当にご両親が不安でいられるっていうのを肌で感じております。先生が親御さんの支援というものが大事だとおっしゃることも本当によくわかったように思います。
- ・私が何の保証もない立場で大丈夫と言っただけで、涙を流されるような場面もあつたりして、親御さんもお子さんも非常に不安でいるという状況が多々見られます。今後は学校にも多様性があるような社会になっていけたらいいのではないかなと思いました。

## 飯盛委員

- ・私は大学の教員をしております。私の分野は特に唯一無二の答えがないような分野です。そういった中で、徹底して考えてもらう、そして行動してもらうということを心がけています。だからみんなで考えようということで、あえて教えないということをモットーとしているというところもあります。これがなかなか難しい。ついやっぱり言うってしまうということは反省しているところです。そういった中で今のお話の中で、何もしない、だけど安心できるような、居場所作りをずっとされてきたということですが、ぜひお伺いしたいのは、そういったことができる担い手をどのように確保、育成していけばいいのかということについて西野先生からのお考えをお伺いできればと思います。

## 西野氏

- ・私達は特に資格要件を持たずにスタッフを雇用しているのですが、やはり眼差しを共有していくというか、生きていくだけOKだよという、その究極の部分共有できるスタッフと一緒にやってくんですけど、大体、自分の問題に気づくという研修が一番大きなウエイトを占めると思います。
- ・子どもを否定的に見始めてしまった自分の物差しをまず疑う。自分が作る、自分を形成してきた価値感が、どの地域の、どの時代の、どういう家族と、どういう中で正しいと思うものが形成されたのか、そしてそれは絶対に正しいことなのか。自分の物差しが違えば、その子自身を丸ごと受け入れられるのか。その自分の物差しを疑うっていうこと、そしてそれは自分の問題なのか相手の問題なのかを分けて考える練習が必要。私が何とかしてあげなければ、この子は駄目になってしまうと思って、本当はその子が問題解決能力を持っているにもかかわらず、これやった方がいい、絶対こっちだよ、みたいにしていり込んでいくと、これではバウンダリーが混乱してしまう。自分とその子との間の境界線が混乱して共依存を生んでしまう危険性も持っています。
- ・「何もしない」ということを保障していくというのは一番苦しいです。大体、何かしたくなるんです。してないと落ち着かない。しているとなんか自分が他者から評価されるような気分になる。立派なお仕事ですねとか、さすがですね、尊いお仕事ですね、と言ってもらえるかもしれない。私達みたいに居場所を開いて好きなことしていいよ、何もしないよと言っていたら、支える立場の私がこれでいいのかという思い、自信がなくなる。でも、どこまでも何もしないってことは本当に子どもたちにこちらから何もしないことを保障していこうとすると、あるとき子ども自身がすごく考え始めるんですね。
- ・子どものその力を信じる、こっちが何もしないっていうスタンスを大事にしようとして子どもを信じてそばにいと、子どもが自分から自分の生き方・やりたいことを本当に考える力、そして動き出す力を持っている。ただ私達はそれを信じればいいと思います。
- ・自分自身が子どもを信じられないときは、何かとアドバイスをしたがってしまいます。だけど、この子は絶対に自分で答えを導き出す力があるはずだって思って命に寄り添うと、ものすごく教えられることがある。だから、自分の問題に気づくということをお大事にしています。

## 鈴木市長

- ・ありがとうございます。では教育長の方から。

## 岩本教育長

- ・ 本日は西野先生には藤沢市のためにお越しいただきまして、貴重なご助言をいただきました。ありがとうございます。日頃から子どもたちのために献身的に活動して来られていることに敬意を表したいと思っております。
- ・ 先ほどからありますように右肩上がりに、不登校の児童生徒が増えております。私達は、つつい数で増えていますというような数字で言いますけども、一人ひとり子どもたちに要因や背景、悩みがそれぞれにあるということです。
- ・ いじめの認知件数が増えていたり、それからコロナ禍で子どもたちの取り巻く環境が大きく変化しているといったことも影響しているんだらうなと思います。
- ・ 一方で、子どもたちや保護者の登校することに対する考え方が大きく変わっていて、登校しないっていうことも理解されるようになったことも影響しているのではないかなと思っています。
- ・ 不登校の話をするときに、本当は登校したいのだけれども不本意な理由から登校ができずに悩んでいるケースとか、また学校という集団で過ごすことに抵抗があったり疑問があったりということで、学校以外の場所で学びたいという意向を持っているとか、こういったケースをひとからげにしないで考えることが必要なかなと考えておるところでございます。
- ・ 不登校児童生徒の増加につきましては、議会などでも多く質問をいただいております。教育委員会としましては、「不登校については登校という結果のみを目標とせず、社会的自立を図り、学校だけでなく、様々な学習機会を活用するという考え方のもと、子どもたち一人ひとりに寄り添い、そのニーズに応じた支援ができるように努めていく必要があります」、と答えて参りました。
- ・ 学校が全てを抱えるのではなく、地域または民間など、様々なところと積極的に連携を図りながら、子どもたちが安心して学びに向かうことができる環境を用意することが肝要であると考えます。しかし私達学校とか教育委員会は、義務教育を背負っているという立場がなかなか抜けない。不登校児童生徒の対応においては、保健室を含む別室登校であったりとか、オンライン学習を導入したりとか、カウンセラーや相談指導教室の活用とか、様々な対応がありますが、いずれも教室への復帰、また登校をめざすということが基本となっている状況がございます。
- ・ 先生のお話にもありましたけども、それらの働きかけがかえって子どもたちを苦しめているケースになっていることも考えられるというようなことでございます。子どもの思いとか保護者の意向を確認した上で、学校がプラットフォームになって、

学校外の学習の場とか居場所に繋げていくことが大切であろうと考えますし、もちろん学校自身が変わるのが最も大切なのだろうと考えます。

- ・自己肯定感とか自己有用感を持つことができずに、自暴自棄の状態から無差別に犯罪を起こしてしまうような事件というものを多く耳にすることがございます。子どもたちが自己肯定感や自己有用感を持つためには、安心できる場所があって、自分の存在意義が確認できて、自分も他人も大切に、そういった思い、そういった環境の中で学びに向かうことができれば、将来の目標や生きがいを持った人生になるはずだと思います。
- ・そのような社会になるために、登校のみにこだわるのではなく、多様な学習の場が用意されることが社会にとって大切なのだと思います。
- ・フリースペースたまりばなどは、まさにそのようなことで運営されているんだろうなと感じました。今後、このような施設等が各地に増え、学校とともに子どもたちの幸せのために連携していければと心から願っておりますし、学校がどこまで変われるかそういったことに取り組んで参りたいと考えます。本日はどうもありがとうございました。

## 鈴木市長

- ・最後にすこしお話ししたいと思います。
- ・藤沢にも約30年か35年前ぐらいまでにフリースクールが存在をしておりましたが、藤沢にも約30年か35年前ぐらいまでにフリースクールが存在をしておりましたが、けれども、当時は不登校に対する地域の偏見とか、そういうものがまだまだ多くあったなと思っておりまして、そこは他の都市に移転をしてしまいました。
- ・不登校に対する社会の対応の仕方も、ここのところ特に変わってきているのではないかと感じておりますし、まだまだこれからどんどん変わっていくし、学校も変わっていくかもしれませんけれども、そういう中においてやはり一つの居場所というのは、大事な要素になってくると思います。それで全てが解決するとは思っておりませんが、なかなかこれでいいという解決はないんですけど、居場所が大きな役割を占めるということは言えると思います。
- ・公設民営にしる、場所の方は何とかあったにしる、やはりそこに担うのは人材ですので、そこに信念を持った方が手を挙げてどんどんやっていただかないと、作っただけで継続していくことがなかなか難しいのかなと懸念します。
- ・そういった人材が手を挙げていただいたり、また医師の先生から紹介していただいたりすることによって、場所そしてそこを担う人材、あるいは地域のコミュニケーションとかいろいろな学校の理解とかいろいろなことが一つになってだんだん良くなっていくのかな、と受け止めさせていただきました。

- ・議題の1についてはここまでといたしたいと思います。西野先生には貴重なお話をいただき、また質問にお答えいただきありがとうございました。
- ・議事の2、“その他”に移りますけれども、事務局からありますか？

## 事務局

- ・議事としては特にございませんが、この場をお借りしまして次回の総合教育会議の日程について事務連絡をさせていただきます。次回第2回の総合教育会議につきましては、現在のところ年明け1月25日木曜日を予定しております。議題等につきましてはこれから調整をさせていただくこととなります。

## 鈴木市長

- ・それではこれで終了といたしたいと思います。大変長い間お疲れさまでございました。進行を事務局にお返しします

## 事務局（司会）

- ・以上をもちまして、令和5年度第1回総合教育会議を閉会とさせていただきます。ありがとうございました。

15時50分 閉会

2023年（令和5年）11月22日

この会議の経過を記載し相違ないことを確認する。

藤 沢 市 長

鈴木 恒夫 

藤 沢 市 教 育 長

岩本 将宏 